

# 難易度だけに頼らない大学選びを 大学・広報の専門家が保護者に伝授

## 神戸海星女子学院大学

神戸海星女子学院大学は2012年のオープンキャンパスで、大学選びをテーマにした保護者向けセミナーを開いた。大学の教育や広報に詳しい学外の講師が、「入試難易度の高い大学は本当に良い教育をしてくれるのか?」と問い掛け、新たな選択指標を提起した。

### 自学のPRではなく 悩める保護者のために

「保護者のための進路研究セミナー」と題する講演会は、8月4日から20日の間に4回開かれた。フリーランスの大学研究者として全国の大学を訪問し、ブログやメルマガで紹介している山内太地氏ら4人に、日替わりで講師を依頼。自学の魅力をPRしてもらうのではなく、「子どもの進学先選びに悩む全ての保護者にとって役立つ話を」とリクエストした。

第2回を担当した山内氏は集まった保護者に対し、「入試難易度などで見栄えのする大学ではなく、わが子の人生にプラスになる大学・学部という観点で選ぶべき」と説いた。

講師は他に、ソーシャルメディアによる大学広報の企画・運用を手掛ける会社の代表・前澤太郎氏、フリーランスの進路選択アドバイザーとして大学選びに関する情報を発信している倉部史記氏、大学の学費の情報を提供する「学費.jp」を運営する会社の代表・景山伸作氏が務めた。いずれも、入試難易度や知名度以外に重視すべき評価軸について話した。

セミナーの開催を提案したのは山内氏だった。神戸海星女子学院大学の小規模校ならではのきめ細かい学生支援に着目し、「保護者にこの点をアピールすべき」と助言。しかし、入試課の蔵澤綾子氏は当初、ピンとこなかったという。「授業についていけない学生に、教員が休み時間や放課後、日常的

に指導する光景は私たち教職員にとって当たり前で、それが『良い大学』の要素だという意識がなかった。

同大学では、進路についても全員と面談し、迷っている学生には「とりあえず就職活動を頑張ってみよう」と背中を押してサポートする。全員の希望を把握するため結果的に分母が大きくなる就職率は、雑誌のランキングに登場する大学と比べると芳しい実績にはならない。また、「インターンシップ制度が充実している大学」としてメディアに取り上げられることはないが、実際には大学主催のプログラムに希望者全員が参加しているという。

「そういう教育や学生支援が本学の良さであり、広報すべきコンテンツだということに、外部から言われるまで気づかなかった」と蔵澤氏。一方で、強く認識せざるを得なかったのは、訪問先の高校の教員からたびたび出てくる「もっと入試難易度を上げて」という注文だった。「高校の先生方は、『私自身は難易度が全てとは思わないし、貴学の良さも知っている。でも残念ながら、それは保護者には通用しない』と言う。何とも悩ましい」。

高校からの重い注文と、多くの大学を見てきた専門家による評価。その狭間で考え続けた結果、大学自らが新しい選択基準を社会に問うことが大事だと思ひ至り、今回の企画が生まれた。山内氏が、同大学を応援するために提案したセミナーのサブタイトル「小規模大学の利点」をあえて外し、全ての大学と全ての保護者にとって有益な情

報を提供しようと考えた。

### 学生の保護者の評価を 伝えることが広報の課題

入試課は今回のセミナーで、プレスリリースの作成やそれを携えてのマスコミ訪問を初めて経験。趣旨に注目したメディアが事前の告知に協力した。

各回のセミナーの参加者は30人前後にとどまったが、アンケートからは、同大学の志望者ではないがテーマに興味を持って参加したという親子がいたこともわかった。今後、伝えていくべき情報や広報のノウハウ、支援してくれる人々の存在など、今回の経験から得るものは大きかったようだ。

同大学は従来、学生の保護者との信頼関係の構築に力を入れ、オープンキャンパスにも積極的に招いている。当日は学長室を開放していて、学長と話し込む母親の姿も見られるという。実際にわが子を入学させてその教育に共感し、キャンパスに足を運ぶ人たちが存在する。こうした保護者の言葉で大学を語ってもらい、その声を外へと広げていくことも、今後の広報における課題といえそうだ。



「わが子の幸せ」のための大学選びについて説いたセミナー。